

デジタル編集夜明け前

中川 正弘

「研究会を作って、会誌も出そう」杉山先生がいつになく力のこもった声で研究会の設立を提案されたのは1982年の春、演習のため先生の研究室に講座の院生がそろってすぐだった。漫然と勉強を続けるのではなく研究をしっかりと尻を叩かれ、論文の発表を具体的な目標としようと言われたのだ。道草しながらでも「研究はこちら→」の案内表示に従って進んでいるつもりだったが、明確な到達イメージが持てるわけでもない領域でどこまで行けるのか、どのあたりまで来ているのかさっぱりわからないのだから、澱んでは流れ、そしてまた澱んでいる時間の沈殿物、堆積物を何とか「モノ」にするしかないと思えた。

当時、論文を書くというのは、規定枚数の原稿用紙を文字で埋めることと考えていた。それが印刷出版される場合、「書式の統一」や「編集」が必要になるが、それはわたしたちの関知するところではない。だれか専門家がやってくれるものだった。研究会誌の場合、掲載の決まった論文の手書き原稿が集まると、配列を決め、それを目次という原稿にして、おおよその体裁をメモのようなもので指定すれば出版社に渡す。だが、こんなややこしい業者とのやりとりはずっと原野先生が担当してくださったので、何をやってたのか思い出すものはない。

「編集」という技術の要る仕事は植字をする印刷業者の仕事に含まれるものなので、基本的にお任せになる。論文を執筆した者、表紙や目次などを担当した者は自分の原稿の校正を数回するだけだ。「論文を書く」とは「論文の内容となるような思考をする」ことであり、それ以外の体裁に関わるような作業は想像もしなかった、とまでは言えないが、原稿の「視覚的印象」に堂々とかかわることはできなかった。

そういう姿勢なので、冊子としてできあがった後、合評会をやってみると、気が付かなかった誤植、注付けなどの様式のばらつきがひどい。それを反省することはするのだが、やはり軽く考えてしまいがちだった。

論文に取りかかると言葉の使い方に試行錯誤を繰り返すが、積み上げては壊し、積み上げては壊す徹夜作業には慣れていた。ワープロのない時代、執筆とは締め切りという期限が来るまで反故を生産することだったと言える。わたしの場合、一日に原稿用紙10枚ぐらいを一気に書いて、翌日はその大半を書き直し、それを繰り返す。少しずつ書き換えたり、書き足すようなことはあまりせず、数語の書き直しで

済ませられなくない場合でも「言葉の流れ」を確認するため全体をもう一度書き直す。声にした時、これが感じられないとだめだった。そういう調子で書くと、文は非常識に長くなり、先輩や先生から「これじゃ分かん。もっと短い文で書け」とよく批判されたものだが、こちらとしてはそのような言葉の勢いや流れにこだわらないなど考えられなかった。

そして、視覚的側面も実はひじょうに意識していた。修士論文を終えてまもなく、学友たちに先駆けて初期のポータブルワープロを購入した。見栄えの悪い手書き原稿を人目にさらさずに済む時代の到来をだれよりも待ち望んでいたからだ。

「8文字×1行表示、フロッピードライブなし、親指シフトキーボード、熱転写プリンター、本体文書保存 A4×2ページ」というものだったが、これではあまりにも非力だった。書いている文章の8文字しか見えないのは、障子の穴から向こうの部屋を見るようなもの。障子の穴なら目を寄せれば向こうがぜんぶ見えるのだから、障子の穴から50センチ離れて見るようなイメージだ。これで論文のような長い文書を作成するのは無理だ。とはいえ、手書きで書いたレポートの「清書」にはじゅうぶん使え、いろんなことに使ったおかげで、親指シフト入力には習熟した。本体に長い文書を保存するメモリはなかったが、外部に保存したい文書があれば、音声データに変換し、テープレコーダーに録音保存ができた。

しばらくすると、後輩の中にもあおられて購入する者が出てきた。表示画面が「20文字×2行」の新型になると、単語表示が文表示になったようなもので、清書をする時の確認と修正が格段にやりやすくなる。そして、数年後には3.5インチフロッピードライブ搭載、原稿用紙半枚分に当たる200字以上の表示が標準化する。

ここまで来ると、「手書き原稿の清書」を超え、「執筆」に使えなくもない。しかし、本格的な編集に必要な文章ブロックの移動や配列・構成の変更が簡単にはできない。残念ながら、全体の構成を練りながらの執筆はまだまだ手書きだった。ワープロのない時代から、引用などフランス語部分については手書きより植字の間違いが少ないということで、タイプライターで打ち出したものを切り貼りしていた。大学に入学してすぐ買ったオリベッティをずっと愛用していたのだが、ごく初期のワープロでもプリント前にスペルチェックができるというメリットだけで、タイプライターに取って代わった。手書きの欧文が私はだめなのだ。判読しにくいだけでなく、書いた時のさまざまな雑念まで蘇りやすい。

タイプライターはキーを下に向かって押し下げる指の動きが長い金属アームを跳ね上げる動きに変換され、一瞬で印字する。「タイプを打つ」と言うが、指がキーを打つのではなく、金属アームの印字がゴムローラー上の紙を「打つ」ことを意味す

るのだろう。このアームの俊敏な動きと「パタパタ (taptap)」という打音が手書き文字のアナログ性を振り切り、デジタル時代を垣間見せた。情緒に働きかけるアナログノイズがなくなると、綴られた言葉は他人のものであるかのような距離、よそよそしさを感じさせ、かなり冷静に見ることができる。

このように打ち出したフランス語部分の切り抜き、のり付けを含め、筆記用具の質感や紙の皺、汚れなど生活感に裏張りされた手書き原稿が初稿で活字になって返ってくると、言葉は印象をガラッと変える。私的なものが公的なものに格上げされたような、「本格的」と見えるその視覚的な印象にみんな「納得」してしまう。いくらでも刷り増しができる印刷術はプリントの数量によって「公」という格式を具現化する。

一方、高精度のパソコンプリントを見慣れた現在の目で見れば、当時の出版社の気合いを入れているわけでもない普通の仕事はやはり相応の水準だ。しかし、今なら「痛い」と感じられるフランス語のアクセント付け、文字・行の間隔設定など、内容の核心には影響しない「些末な」ことでガタガタ言う者はいなかった。文字の本体が活字であればそれだけで「権威」のオーラがあった。

今では印刷業者に編集をお任せすることはまったくといていいほどない。文章書きから、フォントの選択、組み合わせ、ページのレイアウト…体裁に関わるものはコンピュータ上で画面で確認しながら基本的にすべて自分で決定する。完全にデジタル化したのだろうか。そんなことはない。理想とする「美しい文章、美しいページ」はアナログ時代のものを範としてデジタルで再現するだけであることが多い。
(了)

*活版 1~4 号、ワープロ印刷原版 5~14 号、(混在期 12-14 号)、Mac 編集原版 12~30 号

*すべての号が広島大学図書館リポジトリに登録されている。初期のものは粗い画像 PDF ファイルで、フォントデータを含まないため、テキスト検索はできない。比較的新しい、画像精度が上がってからのものは、登録ファイル自体が画像でも、OCR (文字読み取り) で得られたフォントデータが裏張りされているためテキスト検索が使える。ただし、わずかに読み取り間違いが混じる。現在は編集したあと、こちらでフォントデータを含む PDF ファイルを印刷原版として作成し、印刷業者に渡すのだが、これをリポジトリ登録に送るため、完全なテキスト検索ができる。

*古い文書データが残っていれば、現在のコンピュータの標準機能でフォントデータを含む PDF を自分で作成できる。これを広島大学図書館に送れば、低質なプリントをスキャンした画像 PDF からこれに更新してもらえる。